

GLOCOM Discussion Paper Series

26-002

Center for Global Communications, International University of Japan

女子枠論争の対立軸

田中 辰雄

国際大学 GLOCOM 主幹研究員 / 横浜商科大学 教授

GLOCOM

国際大学グローバル・コミュニケーション・センター

<https://www.glocom.ac.jp/>

2026 年 8 月 27 日発行 (No.28, 26-002)

発行人 松山良一

編集長 山口真一

編集委員 渡辺智暁 豊福晋平 小林奈穂 董芸 伊藤将人 逢坂裕紀子

編集 武田友希

発行所 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター

〒106-0032 東京都港区六本木 6-15-21 ハークス六本木ビル 2 階

Tel : 03-5411-6677 FAX : 03-5412-7111

URL : <https://www.glocom.ac.jp/>

本論文は著者の見解に基づくものであり、国際大学グローバル・コミュニケーション・センターとしての公式見解を示すものではありません。

女子枠論争の対立軸

田中辰雄（国際大学 GLOCOM 主幹研究員 / 横浜商科大学 教授）

要約

女子枠への賛否を決める要因を探るため、男女あわせて約 8,000 人にアンケート調査を実施した。男女いずれも賛否は半々程度に割れており、はっきりした多数意見があるわけではない。女子枠を支持する最も大きな要因は、世の中が男性優遇社会だという認識であり、これを是正するという正義の下に女子枠が導入されたと考えられる。ただし、若い世代では男性優遇社会という認識は弱まりつつあり、また、実際、女性は勉強はほどほどでよい、あるいは女性ゆえ理系を諦めるといった教育での男性優遇傾向も最近はなくなりつつある。いまの 50 代～60 代の人々は、自分の若い頃にあった男性優遇傾向を是正しようとして女子枠を進めていると見られるが、20 代～30 代の人々は男性優遇があるとは思っておらず、女子枠を支持できない。女子枠の主要な対立軸はこの世代間の認識の対立である。

キーワード

女子枠、アファーマティブ・アクション、クォータ制、男性優遇、正義

目次

- 1 はじめに
- 2 背景と先行研究
- 3 データと変数
- 4 女子枠賛否の決定要因
- 5 男性優遇バイアス
- 6 要約と考察

1. はじめに

近年、日本の大学入試において、理工系を中心に女子学生のみを対象とする入学枠、いわゆる「女子枠」が導入されている。女子枠は、女性比率の低い分野において女性の進学を促進し、長期的には研究者・技術者層のジェンダー不均衡を是正することを目的とする制度である。一方で、男性が入試選抜で不利になるため公平でないという批判があり、ネット上では激しい論争が起きている。

本稿の目的は、人々の女子枠の賛否を規定する要因あるいは対立軸を探索することである。女子枠は、日本ではおそらく初めての、数量割り当てを伴うアファーマティブ・アクションとして位置づけられる。アファーマティブ・アクションは欧米でも賛否がわかれる制度で、ながい議論と調査研究がなされている。しかし日本では十分な調査研究がないまま、制度は一部大学ですでに実行された。通常、このような強い政策の実行時は入念な調査が行われるのが普通であるが、いくつか検討報告はあるものの実証的なデータは十分ではない。これは文科省が理系分野での女性の比率を増やすことを要請すると述べるだけで、具体的な方法は大学に任せているからと推測できる。経緯は理解できるとしても、調査研究がほとんどないまま論争的な政策を実行に移すのは異例である。本稿はこの欠損の一部を埋めることを意図している。行うのは一般へのアンケート調査でわかる範囲だけであるが、それでも知見を増やすことはできるだろう。趣旨からいって本調査は仮説検証的ではなく探索的であり、得られる成果は知見のリストとなる。

主な知見は以下のようにまとめられる。

- ・ 女子枠への賛否は割れている。女性では4割賛成、4割反対で真っ二つであり、男性では4割賛成5割反対である。年齢別に見ると男性では若年層が反対し、高齢層が賛成する傾向が非常にはっきりと観察される。
- ・ 理系出身女性は女子枠に反対する傾向がある。理系のことをよく知っている理系出身女性が女子枠に否定的なのは考えさせる結果である。また、大学の常勤教員の女子枠賛否は有意にならなかった。
- ・ 今の社会が男性優遇社会であるという認識を強く持つ人ほど女子枠を支持している。この要因の説明力は大きく、他を圧倒しており、女子枠導入の主要因のひとつはここにある。また、正義度の高い人ほど女子枠を支持しており、女子枠の導入は正義として支持されている。
- ・ 「女性であるから勉強はほどほどでよいと言われる」、あるいは「女性であるゆえに理系は諦める」といった男性優遇はいまの50代～60代が若いころにはあった。50代～60代の人々はそれを是正する女子枠を正義と見なしていると考えられる。
- ・ しかし、いまの20代～30代の時代になると、女性は勉強はほどほどでよい、女性に理系をあきらめてもらうというような男性優遇はなくなりつつある。若い男性が男性優遇はあると思わない以上、女子枠に反発するのは自然である。ここにあるのは世代間対立である。

2. 背景と先行研究

アフーマティブ・アクションに関する研究は、制度の効果と制度への賛否の両面から欧米で蓄積されてきた。Greig et al. (2023) は 78 の研究を対象とするメタ分析において、アフーマティブ・アクションに関する知見は割れているが、一つはっきりしていることは有利になる集団は制度を支持し、不利になる集団は支持しない傾向があることだとしている。また、全体として、保護対象となった集団の地位向上に明確に結びついていないとする研究が多いとも述べている。Bowman and O'Neil (2016) は、アメリカでの過去の多くの世論調査を収集し、不利なグループを支援するという広い意味でのアフーマティブ・アクション一般には約 6 割の支持がある一方、数量的な割り当てを伴う制度への支持は 3 割以下にとどまるとしている。

日本の女子枠については、まだ研究蓄積が限られ、特に定量的な調査は少ない。女子枠の意義を説く論文はいくつかあり、その場合、女子枠は、女性が理系への進学がしにくいという不利な現状を是正するために必要な措置だとされることが多い（たとえば、茂木 (2025)）。Naka et al. (2026) は日本人理系研究者 20 人への構造化インタビューを行い、女子枠のさまざまな側面を要約している。女子枠に伴う問題を指摘する人はいたが、それでもほとんどの回答者は女子枠はやる価値があると述べており、女子枠を止めるべきだとする回答者はいなかった。

井門 (2024) は、過去 30 年にわたって女子枠の先行実施をしてきた名古屋工業大学の経験をまとめている。それによれば女子枠によって女子比率が増えたことを前向きにとらえる一方、女子枠入学者の大学院進学率が 40% 程度で、一般入試入学者の 60% より低くなっており、理系の女性研究者育成には成功していないとしている。¹

一方、女子枠に批判的な研究としては、國武 (2026) および Kunitake (2026) がある。氏は、欧米では大学入試の女子枠が一般的ではないこと、短大を含めれば日本での大学進学率は女性の方が男性よりすでに高いこと、性別ではなく所得や地域格差に基づく支援を優先すべきことを論じ、女子枠に批判的な立場をとっている。また、宮本ほか (2025) は、東北大学の事例について、総合選抜など別の手段でも女子比率の向上が可能であり、女子枠が不可欠とは限らないと報告している。

¹ この論文で貴重なのは、女子枠で入った人と一般枠で入った人の 4 年間の学業成績の推移を 9 期分グラフにしていることである（井門(2024), 図 5）。これを見ると女子枠の人の成績が一般枠より低かったのが 3 期、ほぼ同じだったのが 6 期である。この 3 対 6 の数字の解釈は人によって意見が分かれよう。3 期を重く見て女子枠入学者の成績は一般枠より低い傾向があるとみるか、6 期を重く見て一般枠と大差ないとみるかは論者によるだろう。

また、このグラフから読めるもう一つ重要な点は、一般枠と女子枠の成績の差が 4 年間維持されており、学年があがるにつれて次第に接近して収束する傾向がないことである。入った時は入試の枠別に差があっても、入学後の勉強によりまた溶け合って団子状にかたまるといっているのであれば、入試の枠にそれほどこだわる必要はない。しかし、4 年間通じて入試時の差が維持されており、やはり入試の枠は重要であることがわかる。

アメリカのような世論調査型の研究例は、日本では高校生を相手にしたものはあるが、成人相手に行ったものは知られていない。本研究はこれを試みる。

3. データと変数

女子枠賛否の記述統計

調査は 2026 年 5 月に実施したウェブモニター調査である。対象は 20 歳から 69 歳までの大卒者で、当初の回収数は女性 6,000 人、男性 3,000 人であった（調査会社は Freeasy である）。対象を大卒者に限定したのは、自身が大学入試を体験していて、女子枠について意見を持っていると考えられるためである。高卒で就職した人には大学入試の経験がなく、彼らに大学入試での女子枠の事を聞くのは予備知識の点で無理がある。また、女性の意見をより詳細に把握するため、女性サンプルを男性より多く確保した。² サンプルサイズが異なることもあり、分析は常に男女別に行う。不適切回答を除外した後の分析対象は、女性 5,580 人、男性 2,719 人である。サンプルの年齢構成に偏りがあったため、以下の集計および分析では人口分布に合わせたウェイトを用いた。

主たる被説明変数は女子枠への賛否である。最重要な変数なので調査票の文言をそのまま載せる。

理系大学³の入試と教員採用に女子枠を設ける動きがひろがっています。理系大学入試に女子だけの人数枠を作り、また、大学の教員募集で女性だけ限定して公募することです。理系での女子の比率を増やし多様性があがると評価する声がある一方、男性は不利になるので不公平だとの批判もあります。あなたは女子枠に賛成でしょうか、反対でしょうか

女子枠がなんのことかわからない方は、6 を選んでください

- 1 賛成である
- 2 どちらかといえば賛成である
- 3 どちらかといえば反対である
- 4 反対である
- 5 わからない

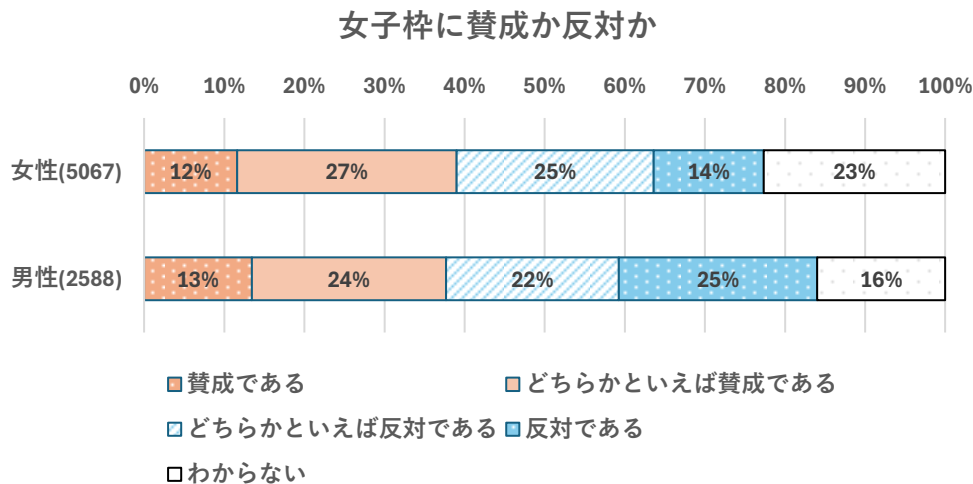
² 具体的には女性の場合、女子枠体験者、並びに女性の理系大学の常勤教員、非常勤講師の数を確保したくて数を増やした。なお、男性のサンプル数が少ないことで有意性の基準が男女で変わるが、幸いなことに男性サンプルの回帰で有意でない場合の z 値はすべて 1 を下回ったので、サンプル数を増やして女性と同等にしても係数の有意性はおそらく変化しないだろう。

³ 正確には理系特化大学と理系学部である。理系の進学先としては、東京科学大学や芝浦工大のように理系のみに特化した大学と、京都大学工学部のように総合大学の理系学部があり、女子枠はどちらにも適用されている。調査票では、簡略化のため、やや雑な表現であるがこれらを理系大学という用語で代表させた。

6 女子枠がなんのことかわからない

この問いで6の「女子枠がなんのことかわからない」という人が女性で6.8%、男性で9.0%存在した。これを除いて結果をグラフ化したのが図1である。

図1



左の赤い色の二つの領域が賛成で、右側の青い領域が反対である。まず、最初にわかることは賛否が拮抗していることである。男女いずれでも拮抗しており、賛成と反対でどちらかが圧倒的に多数派というわけではない。世のネット上の炎上事件では、実は非難しているのは1～2割で少数派にすぎず、多数派がすでにできていることがあるが、この女子枠に関してはそんなことはない。ネットでの論争は実際に国民の間の意見が割れていることの反映である。

詳しく見ると男性と女性では、男性に反対がやや多い。女性では賛成39% (=12%+27%)、反対39% (25%+14%) でぴったり均衡するが、男性では賛成37% (=13%+24%) 反対47% (22%+25%) で、10%ポイントの差があり男性の方が女子枠に批判的である。女子枠は男性に不利、女性に有利な制度であるので自然な結果である。⁴

ここで、女性でも意見がきれいに割れていることは注目に値する。男性に反対意見が多いと述べたが、多いと言ってもその差は10%ポイントであり、圧倒的な差ではない。女性でも賛否は分かれており、この図を見て女子枠問題を男性対女性の利益の対立に還元するのは無理がある。このことは女子枠についての賛否が、男性対女性の対立軸ではなく、何か別の対立軸で生じていることを示唆している。

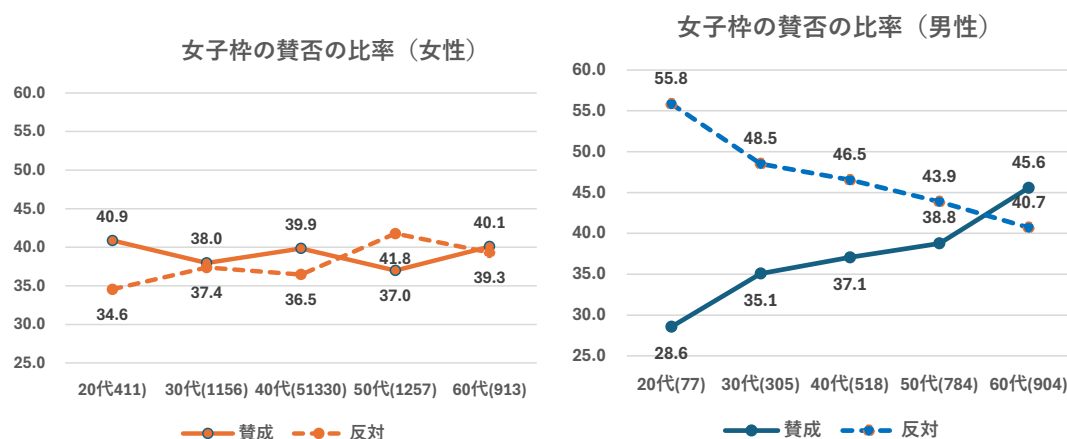
その軸を探るために年齢による差を見てみよう。図2は年齢別の賛成と反対の比率を見たものである。賛成・反対いずれも「どちらかといえば・・・」を含めた値で、左が女性の

⁴ 論理的には文科系の女性受験者が減るので文科系では男子が有利になるはずであるが、この効果は文科系全体に拡散するのでは認知されない。この側面に言及する論文・論説は見あたらない。

場合、右が男性の場合である。

女性は変化幅が小さくほぼ横ばいである。これに対し、男性では巨大な変化がある。50代～60代では女性と同じく40%前後の賛否で拮抗しているが、年齢が若くなるほど反対が増え、20代では55.8%が女子枠に反対で、賛成する人28.6%と30%ポイント近くの違いが出る。逆に、男性の60代では女子枠に賛成する人の割合が45.6%となり、わずかではあるがどの年代の女性より女子枠の賛成者が多くなっている。

図2



なぜ男性の場合、このような世代差が出るのだろうか。入試の女子枠も女性限定雇用も、不利益が及ぶのは男性若年層なので、若い男性に反対が多いのは自然ではある。しかし、個人的な不利益だけでこれだけの差を説明するのは難しい。なぜなら、入試の女子枠で直接に利益・不利益が及ぶのは受験生であり、20代以降の成人では入試はすでに終わっていて今更不利益は生じない。また、大学の女性限定雇用は30代、40代の男性大学院生・非常勤講師にとって大きな不利益であるが、彼らの数は少なく、大半の男性は該当しない。つまり社会全体で見た時、男性の若年層に不利益を受ける人が非常に多いわけではない。それにもかかわらず、若年層と高齢者で賛否がここまで大きく分かれるのはなぜだろうか。

また、対照的に考えると女子に世代差がほとんどないのも不思議である。女子枠の利益は若い世代が中心なので、女性の若年層ほど賛成が増えても良さそうなものである。が、年齢による差がほとんど見られない。

これらの年齢に伴う変化は別途説明を要する。その説明を探るため、いくつかの説明変数を用意して回帰してみよう。

変数の説明

(0)被説明変数

被説明変数は女子枠に賛成する場合を1とするロジット回帰、また反対する場合を1とするロジット回帰を男女独立に行う。選択肢に「わからない」があるため、賛成と反対の

二つの回帰結果（係数の絶対値）は必ずしも一致しない。男性と女性で分けて回帰するので、男女×賛否であわせて4本の回帰式が立つ。

下の式で y は該当する時に 1 となるダミー変数である。

$$\text{Probabilit}(y_{ij} = 1) = \frac{e^{z_{ij}}}{1+e^{z_{ij}}}, \quad z_{ij} = a + bX_{ij} + u, \quad i = \text{女性、男性、} \\ j = \text{賛成、反対}$$

説明変数 X_{ij} として 12 の変数を用意した。探索的研究なので変数は多くなる。以下、順に説明する。

(1)年齢

図2で見た重要変数である。係数を見やすくするために10で割って10歳単位にした。最小値は2.0、最大値は6.9である。

(2)理系出身である

出身学部が理系であるかどうかのダミー変数である。理系学部の例として工学部、理学部、農学部などをあげて該当するかどうか答えてもらった。⁵ 女子枠は理系の大学で導入されており、理系学生を増やすことを狙っているが、理系の大学では実験があったり、研究室の重要性が高いなど文系の大学と異なる面がある。その違いを正しく知っているのは理系の大学の出身者で、彼らは文系の学部出身者よりも知識が多い分、的確な判断を下せると期待できる。女性では17.8%、男性では35.7%が理系出身であった。

(3)女子枠・推薦枠入学者である

女性の場合、自分が大学に入学するとき、女子枠を使ったかどうかを答えてもらった。ただし、該当者の数が予想される値よりかなり高かったので（4.1%）推薦枠あるいは総合型選抜のことだと勘違いして答えた回答者が混ざっている可能性が高い。⁶ 男性の場合は文字通り推薦枠で入学したかどうかを聞いた（該当者13.1%）。予想としては女性で女子枠を使っている場合、自分が使っているのであるから女子枠に賛同するだろう

⁵ 理系と文系の線引きは一定しておらず、たとえば看護学科、コンピューターグラフィックスなどは人によって意見が分かれよう。本稿の目的は女子枠なので、女子枠を導入するような典型的な理系学部を例示し、その上で理系に該当するかどうかを自己判断で答えてもらった。

⁶ 調査票では、回答者自身が女子枠を利用したかどうかは、調査票の冒頭で、女子枠について説明する前に聞いた。これは、回答者の心理的負担とバイアスを避けるためである。女子枠についていろいろ聞いた後で“あなたは女子枠ですか”と尋ねると、問題を挙げ連ねておいて最後に“お前はその問題の当事者か”と指さして尋ねるようなイメージになり、正直に答えづらい。そのために女子枠を使ったかどうかの問いは女子枠について説明を行う前に持ってきた。答えやすくなったが、その代償として、事実上女子が多い推薦枠・総合型選抜を女子枠を誤解して回答した人がでたと考えられる。

(4)男の子がいる、あるいは(5)女の子がいる。

回答者に子供がいる場合、子どもにとって有利な制度を支持する可能性がある。男の子がいれば自分の子供が不利になるので女子枠に反対し、女の子がいれば自分の子供が有利になるので女子枠に賛成するかもしれない。これを見るために男の子がいるか女の子がいるかを変数にとった。該当者は男女ともそれぞれ20%程度である

(6)大学に常勤の教職（教授,専任講師等）として勤務している/したことがある

(7)大学に非常勤の教職（非常勤講師）として勤務している/したことがある

大学で教職についているかどうかである。大学で教鞭をとってあれば、あるいはとっていた経験があれば大学の状況に詳しく、女子枠の是非についての判断材料は一般人より多いと考えられる。また非常勤講師は女性限定雇用で最も影響を受ける人々であり、直接の利害関係者である。女性の非常勤講師は就職の枠ができることになるから女子枠に賛成し、男性の非常勤講師は採用されにくくなるので反対すると予想される。なお、大学で教える人の数は少ないので、該当者数は1～2%である。

(8)都市部9県ダミー、(9)東京圏4県ダミー

これらは回答者の居住地の地域ダミーである。大学進学には地域性があることがわかっており、ならば女子枠の賛否にも地域性があるかもしれないと思って入れた。東京圏4県とは東京、神奈川、埼玉、千葉の4県で、東京にある大学に通える、あるいは子供を通わせることのできる人を想定している。都市部9県とは、この4県に加えて、京都、大阪、愛知、福岡、兵庫を加えた地域で、東京でなくても全国レベルで名を知られた大学に通える地域である。

(10)性別役割分業支持度（標準化変数）

女子枠導入の論拠として、男性は理系、女性は文系に向いているというステレオタイプが女子の理系選択をさまたげており、これを正すために女子枠が必要という考えがある。そこでそのような性別に伴う分業を肯定的にみる指数を作る。測り方としては内閣府男女共同参画局（2021）より、無意識の思い込みの測定指標から次の5つを取り出した。

- 1 男性は仕事をして家計を支えるべきだ
- 2 デートや食事のお金は男性が負担すべきだ
- 3 女性には女性らしい感性があるものだ
- 4 育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない
- 5 共働きでも男性は家庭より仕事を優先すべきだ

これに対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」

「思わない」の4択で答えてもらい、そう思うを4点、思わないと1点で点数を振り、平均値をとる。この指標は、男女が性別に沿って役割分担することをよしとする価値観を

表す。性別役割分業意識が強い場合、男性は理系に向いているという意識が強くなるということがわかっている（Ikatai, et.al. 2020）。したがって、性別役割分業の意識の強い人はそれを強引に崩そうとする女子枠に反対すると予想される。⁷ なお、この変数は回帰分析に当たっては平均 0、標準偏差 1 に標準化する。

(11)男性優遇社会認識度（標準化変数）

女子枠導入の論拠として、日本社会は男性優遇であり、すでに平等ではないので、それを正すために女性優遇の制度を取るという考えがある。たとえば男女共同参画局はポジティブアクションの説明として

「・・・社会的・構造的な差別によって不利益を被っている者に対して、一定の範囲で特別の機会を提供することなどにより、実質的な機会均等を実現することを目的として講じる暫定的な措置」⁸

としている。ここで「社会的・構造的な差別によって不利益を被っている」とあり、すでに平等ではない状況にあることが前提になっている。したがって、現状が女性に不利で、男性を優遇する社会であるという認識がある人は女子枠を支持するだろう。これを変数として測定する。

東京都生活文化局（2020）の「男女平等参画に関する世論調査」にならい、次の 4 つの意見に対してやはり「そう思う」から「思わない」まで 4 件法で選んでもらい、1 点から 4 点まで点をふって得た和の平均値をとる。この指標はいまの日本が男性優遇社会であると思う度合いを表す。男性優遇社会であると思う度合いが強いほど女子枠への賛成は強まると予想される。回帰分析に当たっては平均 0、標準偏差 1 に標準化する。

- 1（現在の日本では）職場において男性が優遇されている
- 2（現在の日本では）家庭生活において男性が優遇されている
- 3（現在の日本では）法律や制度の上で男性が優遇されている
- 4（現在の日本では）学校教育において男性が優遇されている

(12)正義度（言論の自由 vs 正義）（標準化変数）

正義度は、正義と言論の自由のどちらを重視するかの指標である。ここで正義とは絶対の正しさ、すなわちいつでもどこでも誰にとっても正しいと主張することである。これに対し、言論の自由では世に無謬の存在はなく、すべての言論は出発点では同じ資格で存在

⁷ 論理的な可能性としては、性別役割分業の意識の強い人が女子枠を支持する可能性もある。5 項目のうち 3 番目の「女性には女性らしい感性があるものだ」がそれで、女性らしい感性を生かすために女子枠を支持する可能性がないわけではない。

⁸ 男女共同参画局「ポジティブアクション」

https://www.gender.go.jp/policy/positive_act/index.html 2026/7/9 確認

するとする。この二つの立場は対立する。正義の下では、正義に反するある種の発言は認められないが、言論の自由の下でどんな発言も許されるからである。

この正義と言論の自由のどちらを重視するかの指標をつくる。次の 10 の意見に対し、「そう思う」「ややそう思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「思わない」の 5 件法で答えてもらう（「わからない」を加えれば 6 つ）。

- 1 どのような下劣な意見でも持つのは自由で、また発言も出来る社会であるべきだ F
- 2 差別的なことを言う人に言論の自由は無い J
- 3 言論には言論で対抗すべきであり、それ以外の方法を使うべきではない F
- 4 間違った発言で炎上した人は、公の場から消えるまで徹底的に叩くべきである J
- 5 ヘイトスピーチを罰則付きで禁止する法律が必要だ J
- 6 天皇を侮辱する表現は規制されるべきだ J
- 7 ポリコレ（ポリティカルコレクト）は言論・表現活動を委縮させている F
- 8 不愉快な考えの相手とも共存するのが自由な社会だ F
- 9 間違った考えの人には再教育をうけさせ、考えを改めさせるべきだ J
- 10 公共放送たる NHK に反日的な論客を出演させるべきではない J

10 個の意見のなかには、正義の立場の意見（J でマークしてある）、言論の自由の意見（F でマークしてある）の 2 種類がある。正義には、2 の反差別、3 のヘイトスピーチのようにリベラル側の正義もあれば、6 の天皇、10 の反日などのように保守側の正義もある。これからわかるように、正義と言論の自由の軸は保守リベラルの軸とは独立である。正義の方が値がおおきくなるように方向をそろえて 1～5 点の点を振って和をとり、10 で割って正義度とする。この変数も回帰分析に当たっては平均 0、標準偏差 1 に標準化する。

この正義度は回答者が言論の自由と正義のどちらを重視するかを表す。これを説明変数に入れることは、女子枠の導入が正義を重視する人が支持しているのか、言論の自由を重視する人が支持しているのかを判定することを意味する。

理論的な予想としては女子枠は正義の旗の下で行われていると考えられる。なぜなら女子枠は、実証的な証拠があまり集まらないうちに導入が進んでいるからである。言論の自由のもとでは討論して意見の優劣を決め、多数派を作る必要があるため、実証分析が積み重ねられる。多くの官庁の政策はこの筋道をたどる。しかし、正義は絶対に正しいと考えるため、直ちに実行を求めることができる。女子枠はその導入の経緯から見て、男女差別を許さないという絶対の正義の下に進められているのではないかと推測できる。⁹

⁹ なお、この正義度は筆者がネット上の炎上などの論争を分析するために作った指標である（田中（2022）、田中(2024)）。ネット上の炎上では有効な説明変数であることを示せる。ただ、筆者独自の変数なので疑義を感じる人もいるかもしれない。その場合、この正義度を外しても、回帰で他の変数の有意性は変わらなかったことを述べておく。この変数を入れたために、あるいははずしても結果が大きく変わることはない。

4. 女子枠賛否の決定要因

推定結果と考察

用意した 13 個の変数を女子枠の賛否に回帰した結果は表 1 のとおりである。左の 2 列 (I)(II) は女性の場合、右の 2 列 (III)(IV) は男性の場合である。(I) と (III) は女子枠賛成への回帰で、(II) と (IV) は女子枠反対への回帰である。係数は有意なもののみ色つきで記した。赤字は正の値で青字は負の値である。係数は限界効果 dP/dX であり、賛成または反対の確率がどれだけ動くかを示す。たとえば左上の -0.018 は、年齢が 1 単位 (10 歳) 増えるとき、女性では女子枠賛成者が 0.018 だけ低下する、すなわち 1.8% ポイントだけ減ることを意味する。

	表 1			
	(I)	(II)	(III)	(IV)
被説明変数ダミー	女子枠賛成	女子枠反対	女子枠賛成	女子枠反対
比率	0.390	0.383	0.377	0.464
対象	女性	女性	男性	男性
係数	限界効果	限界効果	限界効果	限界効果
(1) 年齢 (10 歳単位) (4.6, 5.3)	-0.018***	0.020***	0.023**	-0.025**
(2) 出身学部は理科系 (17.8%, 35.7%)	-0.046**	0.112***	-0.006	0.002
(3) 女子枠 (男は推薦枠) (4.1%, 13.1%)	0.065*	-0.179***	0.028	-0.032
(4) 子供 (男の子) がいる (25.6%, 23.5%)	0.001	0.035**	0.041*	0.004
(5) 子供 (女の子) がいる (24.4%, 20.2%)	0.040**	0.001	0.011	0.000
(6) 大学で常勤教職 (0.9%, 1.7%)	0.071	-0.057	0.072	-0.042
(7) 大学で非常勤教職 (1.0%, 1.9%)	0.146**	-0.059	0.045	0.021
(8) 都市部 9 県ダミー	0.011	0.001	-0.012	0.036
(9) 東京圏 4 県ダミー	0.005	0.012	0.004	-0.027
(10) 性別役割分業支持度 (標準化)	0.006	0.004	-0.020**	0.031***
(11) 男性優位社会認識度 (標準化)	0.122***	-0.098***	0.170***	-0.184***
(12) 正義度 (自由 vs 正義) (標準化)	0.028***	-0.063***	0.042***	-0.053***
	5,005	5,005	2,558	2,558
*** p<0.01, ** p<0.05, * p<0.1				

順に見て行こう。まず、(1)年齢を見ると 4 ケースともすべて有意である。男性の場合が有意であるのは図 2 から見て予想できたが、女性の場合でも有意になっており、他の変数を制御すると女性でも年齢は有意な説明変数である。

ただ、方向は逆である。男性の場合は 10 歳上がると 2.3%賛成が増え、2.5%反対が減り、高齢者ほど女子枠に賛成である。女性では 10 歳年齢があがると賛成が 1.8%減り、反対が 2.0%増え、高齢者ほど女子枠に反対となる。女子枠を支持するのは、男性では高齢者、女性では若年層で、言い換えると、若年層では男性は女子枠に反対し女性は女子枠に賛成する。女子枠は傾向としては若年男性を不利化し、若年女性を有利化するので自然な結果である。20 代と 60 代での差は 4 を乗じると計算できて、7%~10%程度の賛否の変化が生じている。

次に(2)理系出身を見ると女性のみ有意であり、係数の符号に興味深い結果が得られている。理系女子では女子枠への賛成が 4.6%減り、反対が 11.2%増える。すなわち、理系女子は女子枠に反対する。理系女子は理系のことが他の人よりわかっていて、的確な判断ができると期待されていた。その理系女子が女子枠に反対する傾向があるのは考えさせる結果である。女子枠に伴う問題点、すなわち学力不足やスティグマ問題（女子枠のある大学として世間から低く見られてしまう）などを、自分が理系出身ゆえに真剣に感じているのかもしれない。

(3)の女子枠・推薦枠は女子のみ有意で、女子枠への賛成が増え反対が減っており、女子枠を肯定する結果が得られる。ここでの女子枠の回答者には推薦枠・総合選抜も混じっているので解釈は控えめであるべきであるが、それでも自ら女子枠を選んでいる以上、それを肯定的に捉えるのは自然な結果である。女子枠に賛成だからこそ、自ら女子枠を利用したともとれる。

(4)(5)の子供の性別は、女性では予想通りの結果になった。女性の場合、自分の子供が女の子であるときは女子枠への賛成が 4%増え、男の子である場合は女子枠への反対が 3.5%増えている。自分の子供に有利になる方向に賛否が変化しており、子供の利益に忠実な結果である。

面白いのは男性にその傾向がないことである。唯一男の子の子供がいるときだけ係数が有意になるが、女子枠への賛成が増えており（+0.041）、子どもの利益にむしろ反している。他の係数も有意ではない。¹⁰ 男性には自分の子供の性別に合わせた賛否の変化は起きていない。

女性では子供の性別に合わせて賛否の変化があったが、男性では変化がない。このことの解釈はいろいろできよう。女親は子供への愛情が深く、子どもの利益を第一に考えることもできるし、男親は自分の子供という個別の事情には左右されずに一般性のある意見形成を行うともとれる。他にも解釈は考えられよう。

¹⁰ 男性の方がサンプルサイズが小さいので有意になりにくい面があるが、有意でない係数はいずれも z 値が 0.5 を切っており、サンプルサイズを女性並みに増やしても有意には遠く及ばないだろう。

(6)の大学の常勤の教員は有意にならなかった。大学の教授、准教授、専任講師は女子枠に賛成とも反対ともいえない。これは意外かもしれない。大学が女子枠を導入しているのだから大学の教員は女子枠に賛同して良さそうなものである。実際、Naka,et.al.(2026)のインタビューサーベイではインタビューした 20 人のなかに、明瞭に女子枠に反対した人はいなかった。もし、ほとんどの大学教員が女子枠に賛成なら、この回帰で大学の常勤教員の係数が有意に正になっているはずである。しかし、そうっていない。ちなみに今回のサンプル中に大学の常勤教員あるいはその経験のある人は 101 人いたが、そのうち女子枠に賛成したのは 48 人、反対した人は 37 人であった。賛成する人の方が多いが、反対する人もそこそこは存在する。Naka,et.al.(2026)のインタビュー調査はメールでの依頼、あるいは紹介でインタビュー対象者を選んでいるので、対象者が女子枠賛成の人に偏った可能性がある。

(7)の非常勤講師では、女性の場合のみ女子枠の賛成が 14.6%増えた。14.6%は数字として大きい。女性の非常勤講師は女性限定雇用でもっとも直接に利益を受ける層なので、それを考えると 14.6%という高い数字は納得できる。

興味深いのは男性の非常勤講師では有意な結果が得られないことである（ z 値は0.6と0.3で極めて低い）。男性の非常勤講師は女性限定雇用でもっとも不利益を受けるので、女性の場合と対照的に考えれば、女子枠への賛成が減るか、あるいは反対が増えることがあって良さそうなものである。しかし、そうっていない。男性の非常勤講師は自分たちの利益・不利益を端的に主張していない。彼らには自分たちの不利益を相殺するような女子枠推進の理由があったと考えられる。

(8)(9)の地域性はいずれも有意にならなかった。都市と地方は女子枠賛否とは関係しない。ちなみに九州ダミーもつくってみたがまったく有意にならなかった。九州は保守的風土という声があるが、九州の人が女子枠に反対するという事実は見られない。女子枠の賛否にははっきりした地域性はないようである。

(10)の性別役割分業支持度は男性のみ有意で、予想通り女子枠への賛成が減り、反対が増えている。性別役割分業とは、男性と女性に適性の違いがあって、仕事が男女均等になる必要はないという考えである。したがって、性別役割分業意識を持つ人は、意図的に男女比を等しくなる方向に変えようとする女子枠に反対したと考えられる。なお、女性では性別役割分業が有意にならないのは、一般的な性別役割分業を認める女性でも、理系と文系については性別の適性は無いとみているからであろう。

(11)の男性優遇社会認識度は非常にはっきりとした女子枠の推進要因であった。女性の場合、標準偏差 1 単位分の上昇で、女子枠に賛成する人が 12.2%ポイント増え、反対する人が 9.8%減っている。男性では同じく標準偏差 1 単位分で、女子枠の賛成者が 17%ポイント増え、反対が 18.4%減っている。男性の方が係数が大きいことも注目に値する。現在の日本が男性優遇社会であるという認識と女子枠擁護の結びつきはきわめて強い。ジェンダー平等思想のようなものが背後にあり、それがこの二つの相関を作り出しているとも解釈できる。そして、この相関は特に男性の場合に大きい。

この男性優遇社会の認識の影響は他の要因より大きい。たとえば(7)の女性非常勤講師の場合は 14.6%賛成が増えているが、女性非常勤講師は女性回答者の 1.0%しかいないため、全体として女子枠賛成派の増加幅は 14.6×0.01 で、0.146%にとどまる。(3)~(9)の有意な例でも該当するケースは 25%以下であり、影響は 2~3%ポイントに限られる。これに対し、男性優遇社会認識度は限定なく全員に働く要因であり、影響は大きい。

標準偏差 1 単位分で 10~18%程度の変化を引き起こしており、標準偏差 2 単位分の変化では 20~35%となる。被説明変数の賛否の比率がそもそも 40%程度であるから、その大半を説明してしまう計算になる。この男性優遇社会認識がいかに強力な要因であるかがわかる。

最後に(12)の正義度は、符号が男性優遇社会認識と全く同じであり、やはり女子枠推進要因である。男性と女性で差はない。係数の大きさは絶対値で 0.3 ~0.6 程度で 男性優遇社会認識度の係数の 1/4~半分程度である。男性優遇社会認識度には及ばないが、それでもこれまでの(1)~(10)の要因よりはずっと大きい。

正義度の高い人が女子枠を支持している。すなわち言論の自由より正義を重視する人が女子枠の推進者であることになる。女子枠の実施にあたって、一般人へのアンケート調査、高校教員あるいは大学教員へのアンケート調査など実証的な調査が行われた形跡がない。実証的な論拠が無くても実行に移せたのはそこに正義があったからと考えられる。この場合の正義とはむろん、男性優遇社会を正すことであろう。

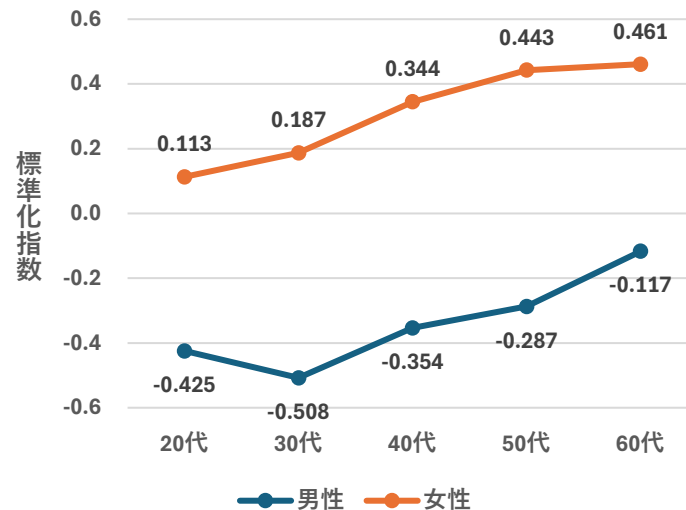
まとめとして表 1 全体を見ると、人々が女子枠に賛成する最大の理由は、今の日本が男性優遇社会だという認識である。この優遇を正すことを正義と思う時、女子枠という異論の多い政策の実施を支持するようになる。男性優遇社会が原因だというのは多くの女子枠推進論者が論説で繰り返し述べていたことであるが、本稿の調査はそれが確かに大きな要因であることを実証的に示したことになる。

男性優遇社会認識度の年齢別の違い

ただ、この男性優遇社会の認識には年齢による差がある。図 3 はこの認識を男女別、年齢別に見たものである。まず、男女の二本の曲線を比べると、女性の曲線は男性の曲線より常に上にあり、女性の方が男性優遇社会だと思う度合いは強い。これは自然な結果である。しかし、注目に値するのは二本の曲線はいずれも左下がりであり、若年層になるほど、男性優遇社会の認識が弱まっていることである。この傾向に男女差は無い。低下幅を 20 代の若年層と 60 代の高齢者を比べると、標準偏差で女性は 0.348 ($=0.461-0.113$)、男性は 0.308($=-0.177-(-0.425)$)だけ、若年層の男性優遇社会認識度が男女ともに低くなっている。男女いずれでも若年層は今の日本を男性優遇社会と思わなくなっている。

図 3

男性優遇社会の認識度：年齢別



現在の社会で意思決定をしているのは50代、60代が多く、彼らは世代としては、最も日本が男性優遇社会だと思っている世代ということになる。意思決定する世代が日本は男性優遇社会だと思っているからこそ、意見が半々に分かれていても女子枠が導入されたと考えることもできる。Naka et.al.がインタビューしている20人のうち14人は教授、一人は学長なので、年齢的にはおそらく50～60代であり、この層にあたっている。

冒頭に述べた図2の年齢別の賛否のグラフについての疑問、すなわち女子枠賛成が男性は極端には右上がり、女性は横ばいなのはなぜか、もこの図3を使って説明できる。元々女子枠という制度は若年層の男性を不利に、女性を有利にする制度なので、年齢だけの効果でいえば賛成者の率は男性では右上がり、女性では右下がりになる（実際、他の変数の影響を取り除いた表1の回帰では、そうなっている）。一方、高齢者ほど男性優遇社会だと思っているため、女子枠を支持する気持ちが強まる。そのため男性では右上がりさらに強まり、一方、女性では右下がりが緩和される。その結果、図2のように男性では強い年齢との相関が出たのに、女性ではほとんど横ばいになったと理解できる。

この年齢による認識の違いが加齢効果（年齢が上がると経験を経て誰もが日本は男性優遇社会だと思うようになる）なのか、あるいは世代効果（その年代の人々が持っている意見で生涯を通じて変わらない）なのかは一回だけの調査ではわからない。しかし過去40年間に日本における女性の地位が不十分とはいえず上がってきたのであるから、世代効果が含まれている可能性は高い。もし世代効果であるなら時間の経過とともに女子枠への支持は下がっていくことになる。女子枠推進派はそうなる前に女子枠の成果、たとえば女性の理系への進学意欲上昇などの効果を示す必要があろう。

5. 男性優遇バイアス

理系への推奨と制約

男性優遇社会の認識があることが女子枠導入に賛成する大きな理由であった。ではどんな優遇なのか。女子枠の場合、男性優遇としては、女性は理系に向いていないという認識—ジェンダーステレオタイプとかアンコンシャス・バイアスなどと呼ばれる—が挙げられることが多い。このような認識ゆえ能力があっても女性が理系進学をあきらめてしまうという説である（たとえば、Schmader,2023, 野崎,2025）。実際、男性の方が理系の能力は高いと考えている女性ほど、理数系での自己評価が低く、理系より人文科学を選ぶ傾向がある（Ertl,(2017)、横山・他(2020)、田邊(2021)）。このバイアスについて調べてみよう。

バイアス自体は真の値がわからないと測定できないため、バイアスを起こす「推奨と制約」を測定する。¹¹ ここで推奨と制約とは、男性だから、あるいは女性だからという理由で、勉強や理系選択を推奨する、あるいは逆に制約する（意欲をくじく）ことである。日本では男女共同参画局が行った調査が知られている（内閣府男女共同参画局（2019））。本稿では、女性の場合、「子供のころ女だから勉強はほどほどでよい」、あるいは「理系はやめて文系にきなさい」と言われたことはあるかどうか尋ねた。男性の場合は、「男だから勉強をがんばりなさい」、あるいは「文系より理系にしろ」と言われたことがあるかを尋ねた。つまり、女性の場合は意欲をくじく制約を、男性の場合は励ます推奨を聞いた。

結果は図5のとおりである。上の二本のバーが勉強についての場合である。女だから勉強はほどほどでよいと言われた人が 5.9%、男だから勉強を頑張れと言われた人が 9.7%である。内閣府調査よりは少ないが無視してよい数字ではなく、性別を理由に勉強を励まされた男性、あるいはくじかれた女性は存在する。¹²

理系選択については制約も推奨も少なく、女性で女性で理系はやめささいと言われたのは2.3%、男性で男なら理系にすべきと言われたのは3.7%であった。理系選択についてはそもそも理系に関心のない文系の女子には理系をやめなさいとは言わないと考えられるので、

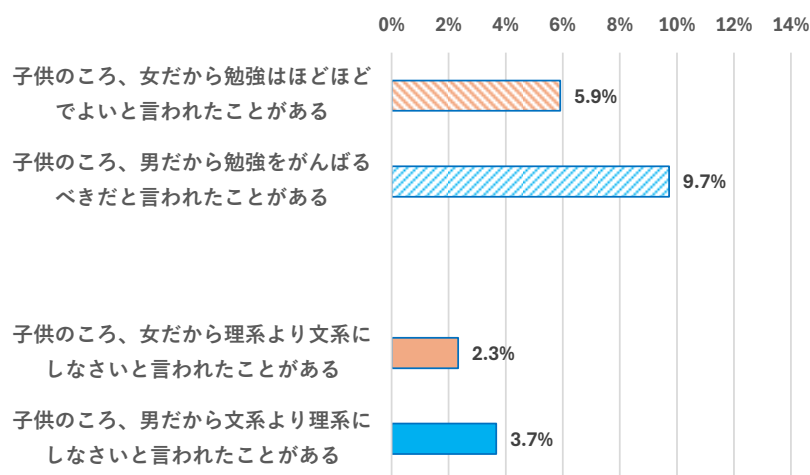
¹¹ 真の値と現実（あるいは認識）のずれがバイアスである。この場合の真の値とは何のバイアスも働かない“自然状態”での理系の男女比率であるが、これを知るのは難しい。しばしば「男性は理系に向いている」という考え自体をジェンダーバイアスと見なすことがあるが、これは理系について性別による向き不向きは存在しないことを、ということは自然状態での理系の男女比率が1対1と仮定することを意味する。このように自然状態での比率を仮定すれば容易にジェンダーバイアスを計算できるが、自然状態での比率は本来、論争的であろう。

¹² 内閣府調査では、子供のころ「男の子だから」「女の子だから」というように性別を理由に勉強について制約あるいは推奨を受けた経験があるかどうかを聞いており、男性で 20%程度、女で 30%が経験があると答えている。ここで得た値 5.9%,9.7%はそれより少ない。値が小さくなったのは、1)今回の設問文が制約・推奨という抽象度の高い言葉を使わずに「勉強はほどほどでよい」など、より特定化された表現をしていること、2)制約と推奨のうち、女性には制約のみ、男性には推奨のみと片方しか聞いてないこと、そして 3)サンプルを大卒者だけに限っているためであろう。最後の点について述べれば、勉強について非常に強い制約を受けて大学進学をあきらめた場合（女性）はそもそもサンプルに入っていない。

理系出身者だけに限って見たところ理系をやめなさいと言われたことのある人は2.3%から3.2%に上昇した。上昇はしたがやはり多くは無い。

図 5

子供のころの制約(女性)と推奨(男性)



理系選択への推奨・制約を受けた人の比率は値としては小さい。が、小さいながらも理系選択には影響を及ぼしたかもしれない。回答者が理系出身かどうかは変数にとってあるので、それを被説明変数にしてロジット回帰してみた。回答者は20～69歳なので、過去の大学進学時に理系を選んだ理由を探る振り返り型の回帰となる。

理系選択に影響を与える他の要因つまり制御変数として、年齢と、親や親せきに理系の人がいたかどうか、ならびに高校の理科科目に女性の先生がいたかどうかを聞いた。結果は表2のとおりである。

表 2

	被説明変数ダミー 比率 対象 係数	(V) 大学は理系 0.173 女性 限界効果	(VI) 大学は理系 0.357 男性 限界効果
(1)年齢（10歳単位）(4.6, 4.7)		-0.015***	0.010
(2)母か父が理系大学を出ている(14.0%, 11.5%)		0.092***	0.062*
(3)親戚・兄弟姉妹が理系大学を出ている(21.3%, 16%)		0.054***	0.061**
(4)中高の物理化学生物に女性の先生がいた(19.2%, 11.9%)		0.034***	-0.011
(5)女だから理系より文系にしろと言われた(2.3%)		0.049	
(6)男だから文系より理系にしろと言われた(3.7%)			0.207***
N		5,580	2,719

*** p<0.01, ** p<0.05, * p<0.1

最初に制御変数から見ると、(1)年齢は女性の場合、マイナスで有意であり、若い人ほど理系進学者が多い。時代の経過とともに女性の理系進学者が増えてきていることの証である。係数が-0.015なので、10歳若くなると1.5%増えており、20代と60代では $1.5 \times 4 = 6\%$ ほどの差がある

(2)、(3)で、親あるいは親戚・兄弟姉妹が理系の大学を出ていると、理系進学者が男女ともに増える。女性について言えば、親のどちらかが理系大学を出ていると、理系に進む確率は9.2%ポイント上がり、親戚・兄弟姉妹が理系に進んでいると、5.4%ポイント上がる。¹³ 同様の傾向は男性にもあり、家族・親族の影響は大きい。遺伝要因を出すまでもなく、家にある理系の本、博物館に連れて行くなど育て方の違い、親の大学時代の研究室の思い出話など家庭内のさまざまな要因が理系選択を促すと考えられる。

(4)は高校の理科の先生に女性がいたかどうかを聞いたものである。女子がロールモデルになるような理系女性に初めて出会う機会は学校での理科の先生と考えられるので、その影響を見るために入れた。女性の場合、理系進学率が3.4%ポイント上がっており、影響は認められる。女性の理系選択の研究では、周囲に理系女性のロールモデルがいることが理系選択を促すことがしばしば指摘されており（たとえば、石倉、林、中室（2026））、それがここでも確認されたことになる。

制約・推奨は(5)と(6)である。男性のみ有意になった。男だから理系にしろと言われた男性の場合、理系進学率は20.7%高くなる。女性では有意ではなかった。

¹³ 厳密には、親戚の場合、回答者が進学を決定して以降にその親戚が理系に進んだ場合は関係ない。たとえば本人が成人した後に甥あるいは姪が理系に進んでも時間的に本人の進路選択とは無関係である。

ただ、この制約・推奨については内生性（逆因果）があり、係数をそのまま因果に解釈することはできない。特に女性の場合は顕著で、そもそも理系進学的意思を示さなければ「女だから理系より文系にきなさい」とは言われない。その女性が理系に行きたいと表明してはじめて理系をやめなさいと言われるようになるので、明らかに逆因果があり、その方向は正の相関である。やめなさいと言われて理系進学をあきらめるなら順因果の方向は負の相関になる。正と負がぶつかるため、係数はその差し引きの効果が示される。結果として係数は有意になっていないため、正の効果と負の効果が相殺されたとみられる。

相殺だとすれば、順因果の負の相関もあったことになるので、理系進学をやめなさいと言われて進学をやめた効果もあったという推測は成り立つ。男性の有意な結果もあわせて、制約・推奨の影響はあったと推測できる。ただし、推測であり、内生性があるので定量評価はできない。

理系を諦めた経験

そこで内生性がないような設問も試みた。聞きたいのは女性が理系に進むときの障害が男性より大きいかどうかなので、思い切ってそれを正面から尋ねた。具体的には回答者自身に次の体験に当てはまるかどうか答えてもらった。

「本当は理科系に進みたかったがいろいろな事情があって文科系に変えた」

この問いはいろいろな事情という時の“事情”の中身を特定していないので、当人の学力不足のような性別とは無関係の要因も入り込む。その代わりに性別を明示せずに行われる性別要因も取り込むことができる。たとえば経済的事情でお金のかかる理系をあきらめてくれと親に言われてあきらめたとする。しかし、女子には経済的事情であきらめてくれと言っても、同じような状況で男子にはそう言っていなければ、結果としては男子を優遇したことになる。近くに理工系の良い大学がないからあきらめたというのも同じで、男性なら東京に出してくれたのだとすると、表面上は性別による優遇策としては現れない。このように表向きは性別を理由にしているわけではないが、実質的に性別による優遇措置である場合、優遇策と認識しにくい。そこで、進路選択の時に理系をあきらめたかどうか尋ねて、もし女性の方が諦めた人の比率が多ければ、暗黙の裡に社会が理系選択で男性を優遇していると解釈できる。また、この方法のもう一つの利点は外部からの要因だけでなく、当人の自己規制も含むことができることである。誰にも言わず、私には理系は無理だなと一人でだけで思い悩んで理系をあきらめた場合もある程度は含むことができる。

実際に聞いた結果が図6である。図6(a)が全回答者中の比率で、男性の方が事情があって理系を諦めた人が多い。しかし、そもそも男性には理系志望の人が多いため、事情が出て諦める人の絶対数が多くなるのは当然である。理想的にはあきらめる前の母数にあたる理系志望の人の総数との比率で見ると必要があるが、そのような母数はわからないので、近

似的に回答者中の理系出身者すなわち理系進学者で割った。¹⁴ それが図 6 (b)である。

図 6 (a)

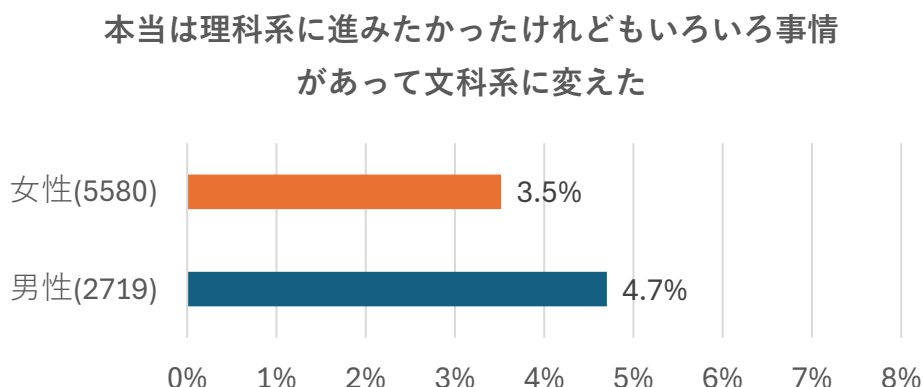
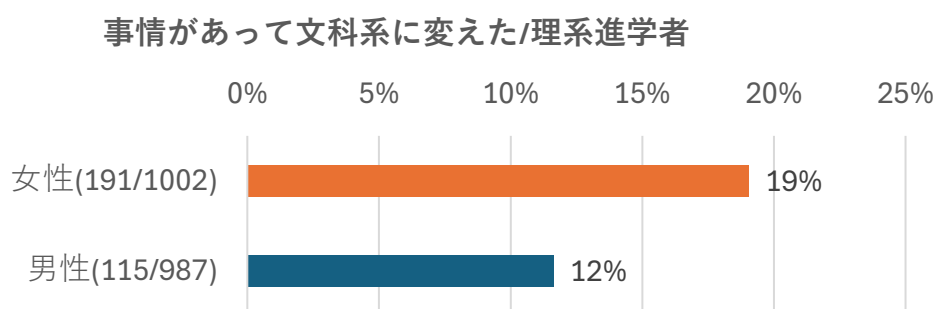


図 6 (b)



これを見ると、女性が 19%、男性が 12%で女性の方が高い。すなわち、女性は理系進学者数の 19%に相当する人が、何らかの事情で理系進学をあきらめており、これは男性の 12%よりも多い。差の 7%分は女性が男性より多く理系進学を諦めていることを意味する。経済的事情や近くに通える理工系の大学がないなど地域の事情、そして性別による制約・推奨もあろう。それら様々な事情を含めて女性は男性以上に理系進学をあきらめている。事情の中には学力不足など性別以外の要因も含むため、7%をすべて男性優遇のためとすることはできないが、理系進学について結果としての男性優遇が存在している可能性はきわめて高い。

優遇バイアスの世代差

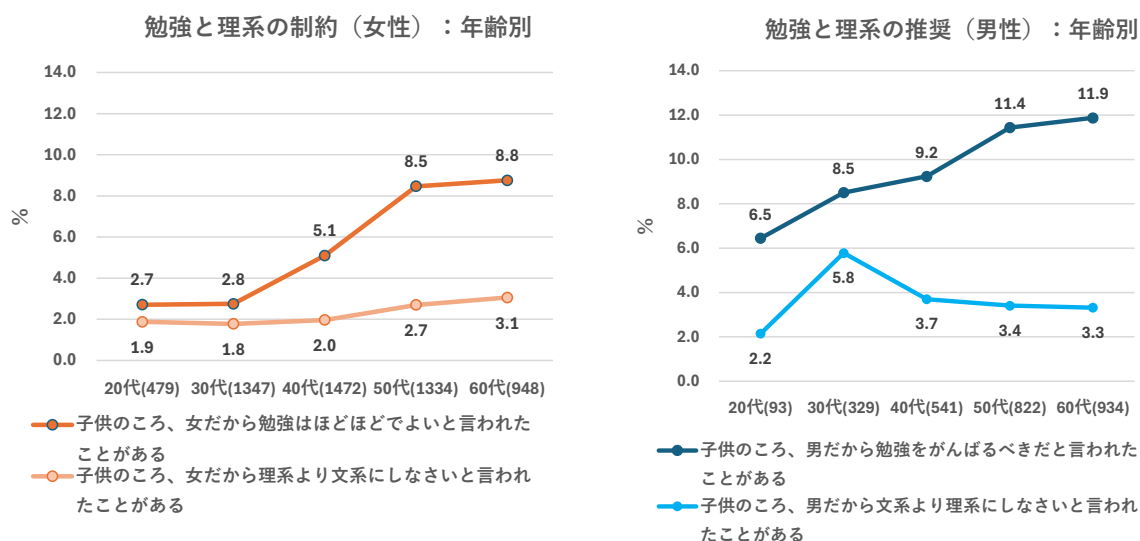
ここまで、勉強に関する制約と推奨（ほどほどでよいか・頑張るべきか）、ならびに本当は理系に行きたかったがあきらめた人の割合、この二つでいずれも男性優遇があるとい

¹⁴ したがって、数字は内数（内訳の率）ではない。図中に女性では 191/1002 であるが、191 人はあきらめた人なので理系には進んでおらず、1002 人は理系にすすんだ人である。

うことを述べてきた。男性優遇は確かに存在した。

しかしながら、年齢別に見るとまた事情が変わってくる。図7は図5の性別による制約・推奨を年齢別に見たものである。左が女性で右が男性である。これを見ると勉強に関する制約・推奨の経験率は男女とともに年齢が若くなるにつれて急減している。特に女性では60代では8.8%程度の人が女だから勉強はほどほどでよいと言われた経験があったのが、20代では2.7%にまで減少している。

図7

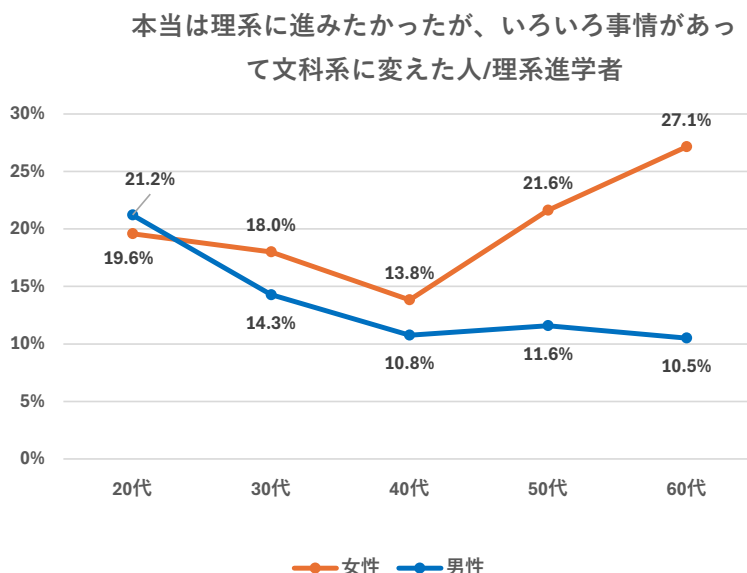


8.8%とはほぼ1割なので、女性が10人いれば一人くらいは、女だから勉強はほどほどでよいと言われた経験を持っていることになる。10人に一人なら、友人同士の日常会話のなかで話題として「彼女、女だから勉強はほどほどでよいって言われたらしいよ」と出てきそうな水準である。しかし、2.7%となると、40人弱にひとりなので、学校で言えば女子高なならクラスに一人、共学なら二クラスに一人である。それだけ少ないと例外的となり、話題となることも少ないだろう。50～60代の人にとっては、女だから勉強しなくて良い、というのは普通に聞いたことのある話であるが、20～30代の人にとってはめったに聞かない話となったと考えられる。

事情があって理系をあきらめた、についても同じような年齢別の傾向を指摘できる。図8は図6(b)の、諦めた人の比率（理系進学者に比べての比率）を年齢別に見たものである。50～60代では女性の理系進学者に比べて2割程度の人、すなわち50代で21.6%、60代で27.1%の女性が理系をあきらめていた。同じ時期の男性で理系を諦めていた人の比率は11.6%、10.5%であるから、女性は男性の2倍以上に理系を諦めていたことになる。2倍という差は大きく、体感としても感じられるだろう。50代～60代の人にとって自分たちが大学に進学する時代、事情があって理系をあきらめる人に女性が多かったというのは体感と

して事実だったと考えられる。女性ばかりが理系から遠ざけられるという事態は確かにあったのである。

図 8



しかし 40 代より下になると状況は変わる。図からわかるように理系を諦める人の比率は男性と女性でほとんど同じになっている。40 代で 10.8%と 13.8%と 3%の差になり、20 代になると逆転し、男女の差はほとんどない。女性だけが理系の道から遠ざけられるという事態は解消されている。

この二つのグラフからわかるのは、女性を勉強からあるいは理系から遠ざけようという動きは今の 50～60 代が大学に進学するころ、つまり 30 年前から 40 年前には確かにあったということ、しかし、今ではそれが見られなくなっているということである。

50 代～60 代の人々が大学進学について男性が優遇されていると判断するのは自分たちの体験からすれば当然であり、その是正を絶対の正義として女子枠を主張するのも自然である。女子枠を導入した東京科学大学の理事は、女子枠が男子への逆差別ではないかとの批判に対し、次のように答えている。

「「いま」で捉えるのではなく、過去の歴史を振り返り、実質的に平等になっていない現時点を把握し、将来を考えてほしい」（井村、2025）

このなかの「実質的に平等になっていない現時点」という言葉は、過去の男女間の不平等が今も続いていると考えていることを意味する。それを解消するのが女子枠ということになる。

一方、今の 20 代～30 代の若い世代の男性からすれば、男性優遇はもう消えつつある現象である。彼らの視点から見れば、ありもしない男性優遇を理由に不利な扱いをうけること

に納得できず、憤りを感じても不思議ではない。女子枠批判の立場をとる國武氏は述べる。

「・・・欧米先進国においては、「女子枠」のようなクォータは四半世紀以上前から「違法な性差別」として禁止されてきた歴史がある。」國武（2026）

國武氏自身は慎重な表現をしているが、ネット上に展開される女子枠反対論では、より直接に女子枠は不当な男性差別だと言い切る例が多い。若い世代にとって、女子枠とは男性差別以外の何物でもない。

ここにあるのは世代間対立である。冒頭に女子枠の対立軸は男性対女性ではないと述べた。本稿の調査によれば、女子枠の対立軸は世代間対立である。ここで世代間対立とは、世上よく言われる過去のつけを現役世代につけているという対立ではなく、そもそも現実の認識に世代間に大きくずれがあるという意味での対立である。

6. 理系女子を増やす方法

最後に理系女子を増やす他の方法についても尋ねたので報告しておく。図9は、理系女子を増やす方法として何が良いかをいくつかの候補を上げて聞いてみた結果である。図9(a)は最も良い方法を一つ選んだ場合、図9(b)は複数回答で3つまで選んでもらった場合である。グラフには男女に分けてバーが描いてあるが、男女で相違はなかったので、以下では男女は区別せずに説明する。なお、問い自体に疑問を持つ人もいると予想して「特に政策をとらずに自然に任す」という選択肢も最後に用意し、回答者に注意を促した、

検討に入る前に結果の頑健性について触れておく。この図は、理系出身者だけに限っても、大筋で変わらない。また年齢を20代～30代のみ、あるいは50代～60代だけに限っても変わらなかった。すでに述べたように男女に分けても変わらない。したがって、これから述べるのは理系文系の別、年齢、性別によって変わることはない頑健な結果である。

図 9(a)

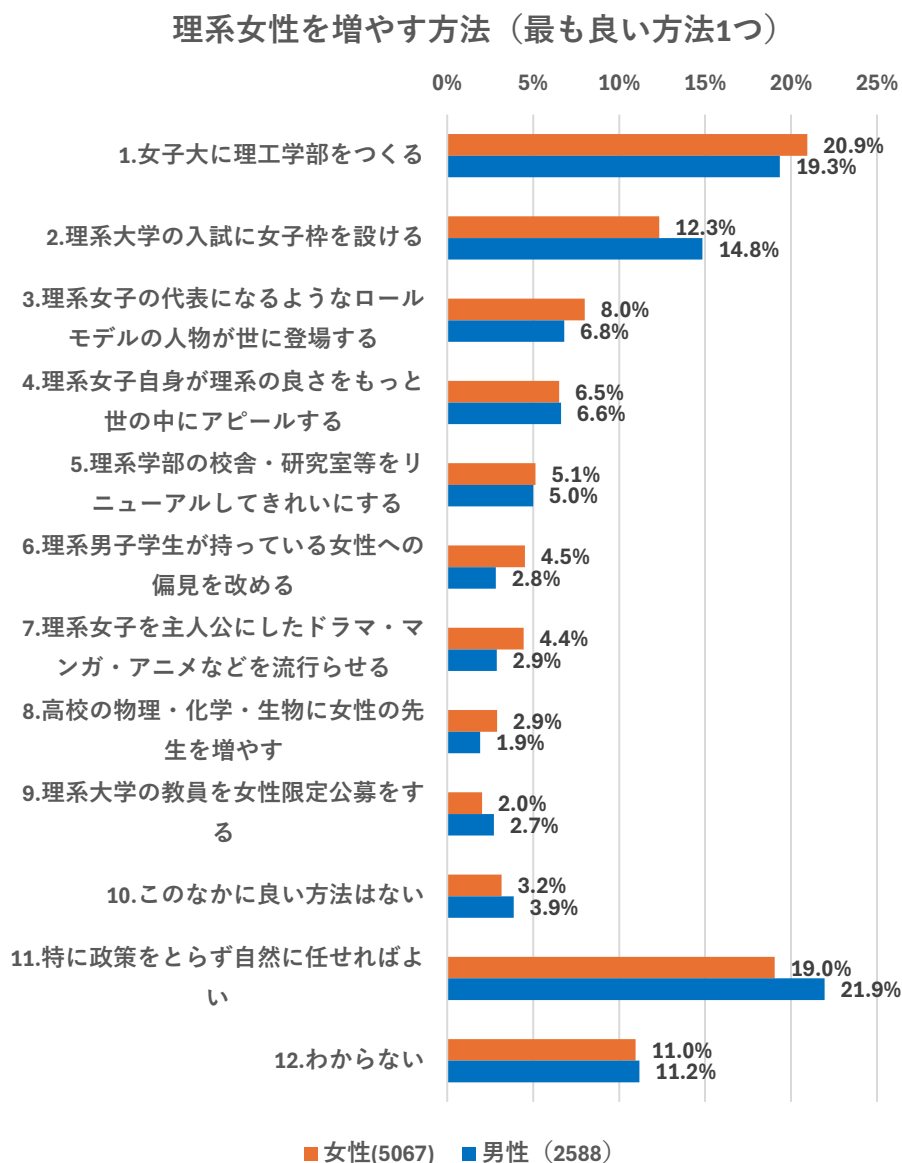


図 9 (a)の一つだけ選んだ場合を見る。最も支持をあつめたのは「1.女子大に理工学部をつくる」で、2 割の人がこれを選んでいる。女子大に理工学部をつくることは追加費用はかかるが、女子枠のような対立を引き起こす心配はない。そこで雇用される教員を女性限定採用すれば、男性研究者の雇用を減らすことなく理系の女性研究者の増やすこともできる。

ついで「11.特に政策をとらずに自然に任す」が同じく 2 割の支持を得ている。理系の女性研究者を意図的に増やすという目標は昨今の社会の既定値になった感があるが、この目

標自体に懐疑的な人が一定程度は存在している。男女で大きな差がなく、男性だけの意見ではないことも注目に値する。

三番目に「2.理系大学の入試に女子枠を設ける」が来る。現在行われている女子枠も有力な理系女子を増やす方法と認識されている。これを挙げる人は約 13%くらいであり、（放置を除いて考えると）政策として2位につけている。

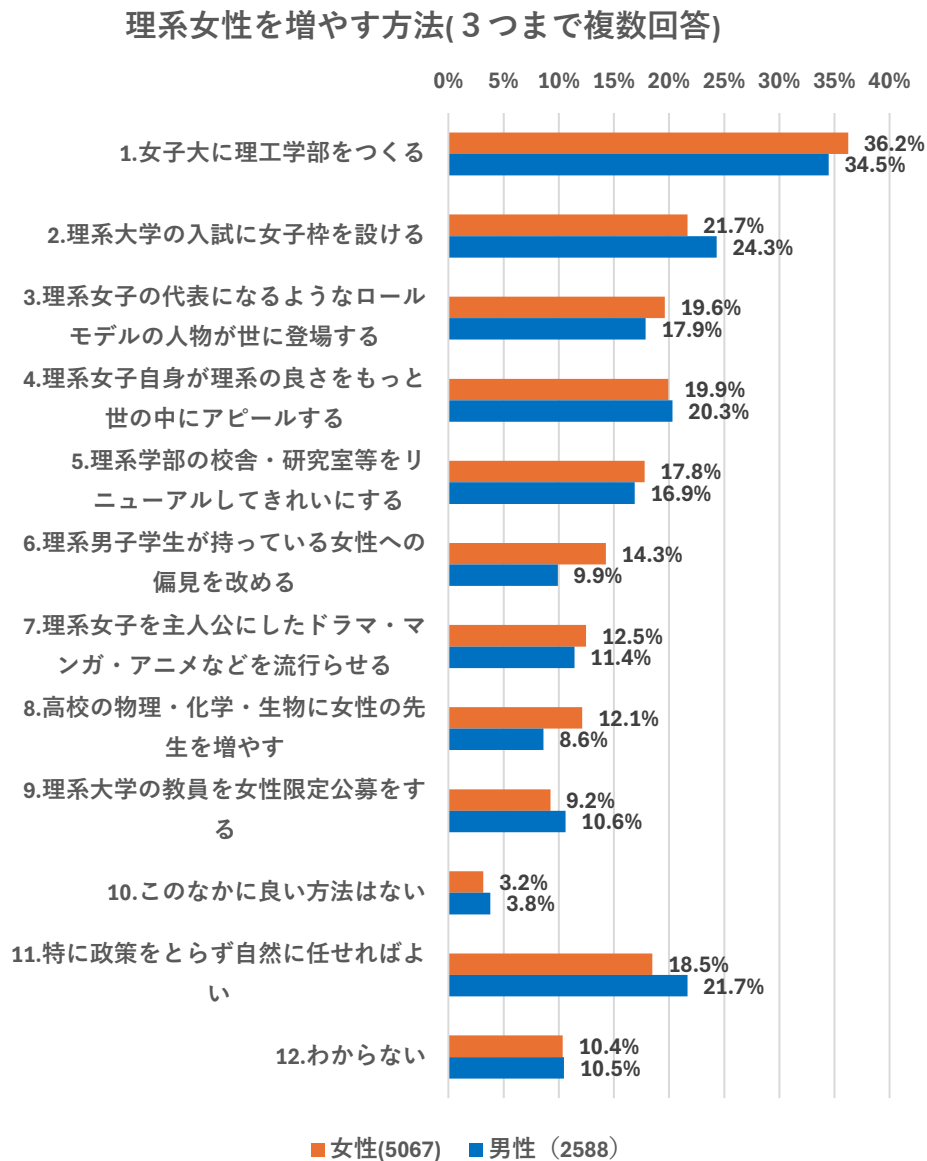
四番目は「3.理系女子の代表となるようなロールモデルの人物が世に登場すること」であり、7%程度の人がこれをあげている。女子が理系を選択する理由の一つに目標となるような理系女性のロールモデルに触れることが挙げられることがあり（石倉、林、中室（2026））、それに沿った結果である。他の選択肢にもロールモデル型の対策と解釈できるものがあって、「7.理系女子を主人公にしたドラマ・マンガ・アニメなどを流行らせる」と「8.高校の物理・化学・生物に女性の先生を増やす」も、ロールモデルの一種と見なせる。この3つを足し合わせると女性で15%、男性でも12%くらいにはなるので、広い意味でロールモデルを有効と考える人は多い。

五番目は「4. 理系女子自身が理系の良さをもっと世の中にアピールする」で6%、六番目は「5. 理系学部 of 校舎・研究室等をリニューアルしてきれいにする」で5%である。それ以下は5%以下のものが続いている。

図9(b)は良いと思う方法を複数回答で3つまで選んでもらったときである。単数回答では5~7%程度の支持だった3~5番の政策が一斉に20%程度の支持をあつめており、それなりの有効性を認められていることがわかる。

全体として女子枠は理系の女性比率を上げる一つの方法であるが、それ以外にも有効な方法と認識されている方法は存在する。特に女子大に理工学部をつくることと、ロールモデルをつくることは有力な方法と見なされている。

図 9 (b)



7. 結論と考察

本稿は探索的研究なので知見をまとめておく。女子枠への意見を大卒の人を対象にして調べ、次の知見を得た。

- (1) 女子枠への賛否は割れている。女性では4割賛成、4割反対で真っ二つであり、男性では4割賛成5割反対である。男性の方が反対がやや多いが、違いは小さく、対立軸は男性対女性ではない。
- (2) 年齢別に見ると男性では若年層が反対し、高齢層が賛成する傾向が非常にはっきりと観察される。60代男性では賛成と反対が1対1で拮抗するが、20代男性では1対2で

反対が賛成の2倍にもなっている。

- (3) 理系出身女性は女子枠に反対する傾向がある。理系出身者であると女子枠賛成が 4.6% 減り、女子枠反対が 11.2% は増える。理系のことをよく知っている理系出身女性が女子枠に否定的なのは考えさせる結果である。
- (4) 大学の常勤教員の女子枠賛否は有意にならなかった。女子枠の導入は大学が主導しているが、大学で圧倒的な多数意見が出来ているわけではないようである。本サンプルでは約百人に大学教員・教員経験者のうち約 5 割弱が女子枠賛成、約 4 割弱が女子枠反対であった。
- (5) 今の社会が男性優遇社会であるという認識を強く持つ人ほど女子枠を支持している。この要因の説明力は大きく、他を圧倒しており、女子枠支持の主要因はここにある。また、正義度の高い人ほど女子枠を支持しており、女子枠の導入は正義として進められている。合わせて考えると、女子枠は男性優遇社会を正すという正義として支持されていると解釈できる。
- (6) 「女性は勉強はほどほどでよいと言われる」、あるいは「女性ゆえに理系を諦める」といった現象はいまの 50 代～60 代の人々が若いころにはあった。50 代～60 代の人々が自身の体験に基づいてこのような男性優遇を感じ、それを是正する女子枠を正義と見なすのは自然なりゆきである。
- (7) しかし、いまの 20 代～30 代の世代になると、「女性は勉強はほどほどでよい」、「女性に理系をあきらめてもらおう」というような現象はなくなりつつある。大卒に課する限り一般論としても日本が男性優遇社会だと思う人は若い人ほど減っている。若い男性が教育に男性優遇があると思わないなら、女子枠に反発するのは当然である。ここにあるのは世代間対立である。
- (8) 理系の女性を増やす方法は女子枠だけではない。人々の意見では、女子大に理工学部をつくる、ならびに理系女性のロールモデルをつくるという方法に支持が集まっている。

以上をまとめると、本稿の調査結果は、どちらかといえば女子枠推進側に厳しい結果と言えるだろう。女子枠推進の有力論拠である大学進学における男性優遇が弱まっていることを示しているからである。女性だから勉強はほどほどでよい、あるいは女性ゆえに理系をあきらめるといった現象は昔はあったが今は無くなっている。もし大学進学において男性優遇がなくなってきたのなら、女子枠は大きな論拠をひとつ失う。

ただし、ここで話は終わらない。仮に本稿の調査結果どおりに男性優遇がなくなっているというのなら、なぜ日本の理系女性の比率が先進国で最低であるかの説明が別途必要になるからである。¹⁵ 政府が女子枠導入をすすめるもう一つの大きな論拠は、欧米先

¹⁵ 日本の中学3年生段階で数学・理科の成績に男女差は見られないが、国語の成績は女子の方が優れているので（文部科学省 2025）、比較優位の観点から理系より文系を選ぶ女子が多くなるのには合理性がある（国語の成績と理系選択には負の相関がある。井上・田中(2025)）。しかし、それでも日本の理系分

進国の中で日本の理系の女子比率が最低水準だという事実である。これを説明しようとするれば、制約・推奨とは切り離されたアンコンシャス・バイアスそのもの（これは本稿では扱っていない）、あるいは選好の差、将来設計の違いなど別の要因を探す必要が出てきて、その中に女子枠を支持する要因があるいはあるのかもしれない。これは残された課題である。

文献

Ertl, Bernhard, Silke Luttenberger, Manuela Paechter 2017 "The Impact of Gender Stereotypes on the Self-Concept of Female Students in STEM Subjects with an Under-Representation of Females" *Frontiers in Psychology*. Educational Psychology 17 May 2017

Greig, Samantha M., Sarah P. Coundouris, Genevieve L. Fletcher, Julie D. Henry, Courtney von Hippel, 2023, "The help that hinders? A meta-analysis of reactions to affirmative action," *European Journal of Social Psychology* 53:1475–1523

Ikkatai, Y., Minamizaki, A., Kano, K., Inoue, A., McKay, E., & Yokoyama, H. M. (2020). Masculine public image of six scientific fields in Japan: physics, chemistry, mechanical engineering, information science, mathematics, and biology. *JCOM*

Karlyn Bowman and Eleanor O’Neil 2016, “Public Opinion on Affirmative Action” American Enterprise Institute
https://www.aei.org/wp-content/uploads/2016/06/Public-Opinion-on-Affirmative-Action_June-2016.pdf

Kunitake, Y. ,2025, “Affirmative action in Japanese higher education: A critical examination of DEI implementation,” *Social Science & Humanities Open*, 101312.

Naka, Reiko, Shawn Mobley, Jia Liu, Hiromi M. Yokoyama, 2026, “How Do Physics and Engineering Faculties Evaluate Direct Affirmative Hiring for Women in Japan?” *Research in Higher Education* 67

Schmader, Toni, 2023, "Gender Inclusion and Fit in STEM", *The Annual Review of Psychology*. 2023. 74:219–43

石倉秀明、林良平、中室牧子、2026、「クラスの女子比率が STEM 分野への大学進学に与える影響」RIETI Discussion Paper Series 26-J-019

井上敦、田中隆一、2025、「経済・商学部進学率の男女差」
RIETI Discussion Paper Series 25-J-018

井村順一、2025、「D&I 推進に向けた女子枠入試の導入-東京科学大学の事例-」 八大学工学系連合会公開シンポジウム 2025 年 3 月 28 日（金）

野の女子比率が先進国中の最低の値になることは別途説明が必要である

井門康司、2024、「名古屋工業大学における女子推薦入試の実施とその効果について」、工学教育、72(1) pp.20-25

國武悠人、2025、「米国判例の変化と日本への示唆：STEM 分野のアファーマティブ・アクションと DEI」 『工学教育』 73（2）, 2_2-2_6.

國武 悠人 2026, 「「女子枠」は差別なのか？：国際的議論と日本の研究動向——導入の課題と大学入試政策への示唆——」 大学入試研究ジャーナル第 36 号, 31-38, 2026

田中辰雄、2022、「呉座・オープンレター事件の対立軸——キャンセルカルチャーだったのか？」 SYNODOS 2022 年 2 月 23 日
<https://synodos.jp/opinion/society/27733/>

田中辰雄、2024、「アサクリ・弥助炎上事件——正義とキャンセルカルチャー」 シノドス 2024 年 8 月 20 日
<https://synodos.jp/opinion/international/29244/>

田邊和彦、2021、「日本における性別専攻分離の形成メカニズムに関する実証的研究——STEM—ケアの次元に着目して——」、教育社会学研究第 109 集（2021）

内閣府男女共同参画局（2019）「多様な選択を可能にする学びに関する調査報告書」
https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/select_research/08.pdf

内閣府男女共同参画局（2021）「性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」
https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r03/02.pdf

野崎亜紀子（2025）「ジェンダー規範と社会変革：大学入試女子枠制度から考える」 『法学教室』 03（534）, 21-24.

東京都生活文化局（2020）「男女平等参画に関する世論調査」
https://www.spt.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/press/2021/03/29/documents/01_02.pdf

宮本友弘・林如玉・久保沙織・倉元直樹・長濱祐幸（2025）「東北大学の入学者選抜における男女差の様相——選抜区分に着目して——」 『大学入試研究ジャーナル』 35, 7-14.

茂木洋平（2025）「国立大学の入学者選抜における女子枠（クォータ制）は憲法違反なのか？」 『桐蔭法学』 31（61-62）, 1-22.

文部科学省（2025）「全国学力・学習状況調査」
https://www.mext.go.jp/content/20250731-mxt_chousa02-000044035-02.pdf

横山広美、一方井祐子、井上敦、南崎梓、加納圭、ユアン・マツカイ（2020）「多様なイ

ノベーションを支える女子生徒数物系進学要因分析」科学イノベーション政策のための科学
https://www.jst.go.jp/ristex/funding/files/JST_1115110_17942917_2018_yokoyama_YR.pdf

補論：女子枠についての高校生の意見 2026

データ収集

女子枠について現役の高校生はどう考えているのかについて 2026 年 5 月時点で簡単な調査を行った。女子枠についての評価は時の経過とともに変わっていくと思われるので、2～3 年すれば変わっているだろう。導入直後の記録を残すことには意味があると思われるのでここにまとめておく。

先行調査としては一橋新聞と河合塾が行った調査とが行った調査がある。¹⁶ 一橋新聞(2025)では埼玉県的女子高生 383 人について調べ、女子枠に賛成が 53.5%、反対が 38.1%であった。河合塾(2025)は入試共通テストトライアルに来た男女高校 1, 2 年生 3762 人について聞いて賛成 56%、反対 46%だったとしている。いずれも参考になるが、一地方の女子のみ、高 1、2 のみなど制限がある。

本稿では本文と同じようにウェブモニター会社(Freeasy)を使って 15 歳～18 歳のサンプルを 2000 人集めた。全国の全学年の高校生である。うち、大学に進学する予定のない人、またすでに社会人あるいは大学生の人を除いて残った 1084 人が対象サンプルになる。なお、高校生のサンプルは集めにくいと、年齢・性別の割り付けをせずに目いっぱい集めたところ、結果として男女比が大きく偏ってしまい、女子 886 人、男性 198 となった。意図せざる結果であるが、そのおかげで女子の場合は年齢別など細かい変化を見ることができた。

理系志望と文系志望は補表 1 のとおりで、性別と志望によって 4 グループに分ける。上から順に、理系女子、文系女子、理系男子、文系男子とし、以下の分析ではこの 4 グループごとに結果を見て行く。表からわかるように女子の理系志望者、すなわち理系女子は女子の 36.2%の 321 人、男子の理系志望すなわち理系男子は男子の 55.1%の 109 人であった。

補表 1

	n	%	名称
1 女子高校生で理系の大学に行く つもりである	321	36.2%	理系女子
2 女子高校生で文系の大学に行く つもりである	565	63.8%	文系女子 計886人
3 男子高校生で理系の大学に行く つもりである	109	55.1%	理系男子
4 男子高校生で文系の大学に行く つもりである	89	44.9%	文系男子 計198人
総計	1084		

¹⁶ 河合塾 2025/2/18 「拡大する大学入試「女子枠」 高校生の受け止めは？ ～2 年前より「賛成」が減少。

背景には狙いやメリットのアピール不足か～」

<https://www.kawaijuku.jp/news/newsrelease/20250218.html>

一橋新聞 2025/1/30 「女子高生対象アンケート 女子枠『賛成』5 割超」一橋新聞。

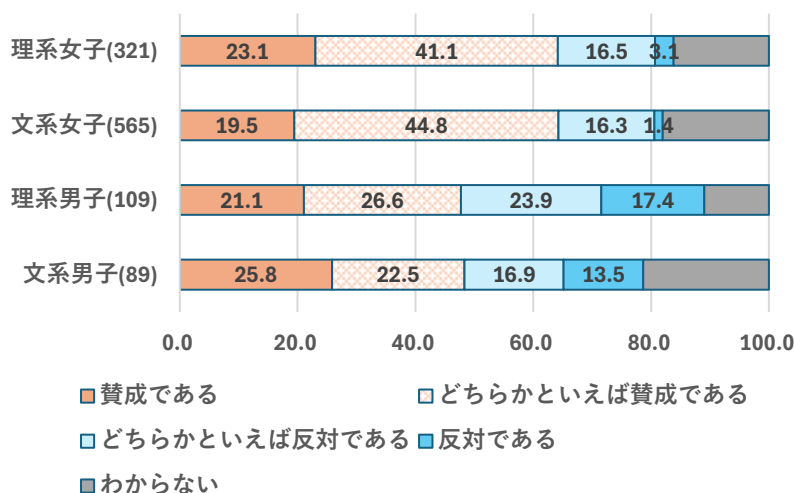
<https://hit-press.org/projects/4116>

女子枠の賛否

女子枠の賛否設問文は「女子比率の少ない学部女子枠を導入する取り組みをどう受け止めますか？」である。結果は補図1のとおりである。バーの左の二つの赤系統の領域が女子枠賛成を、その右側の青系統のふたつが女子枠反対を表す。

補図1

女子枠への賛否：グループ別



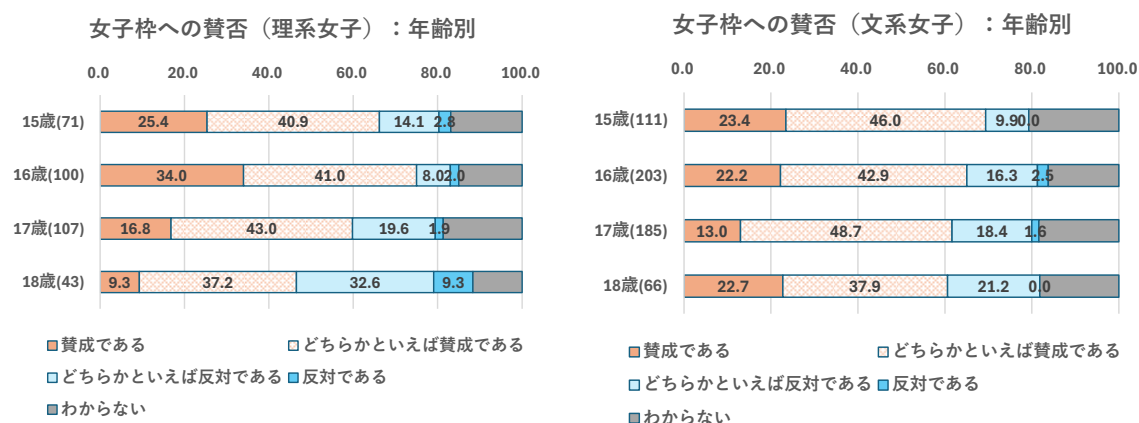
まず、女子では理系と文系にほとんど差がなく、65%程度が賛成で、反対は20%程度である。男子では50%弱が賛成であり、反対は理系で40%程度、文系で30%程度になる。全体としては賛成が優勢である。本文中で見た成人調査では、賛否は女性では拮抗し、男性では反対が10%多かったことから比べると明らかに賛成が多い。一橋新聞と河合塾の調査でも10%ポイントの差で賛成が優勢になっており、それと整合的な結果である。成人の調査では拮抗していたのが、当事者である高校生では女子枠への賛同者の方が多い。これは女子枠推進派をサポートする材料である。

ただし、年齢別に見ると簡単には言えなくなる。補図2は女性について15歳～18歳で年齢別に分解したものである。左の理系女子の図を見ると、15歳～16歳では女子枠賛成が70%であるが、年齢が上がると賛成が減り、18歳では46.5%にまで低下している。逆に女子枠反対は年齢が上がる連れて増加し、18歳時は女子枠反対が41.9%に達し、賛成派とほぼ拮抗する。文系女子でも理系女子ほどではないが、年齢があがるにつれて女子枠賛成が減り、反対が増えてくる。

これはなぜであろうか。わずか1～3歳で世代効果が発生するとは思えないので、加齢効果であろう。この場合は加齢とはすなわち学年が上がることである。なぜ学年が上がると女子枠反対が増えるのか。一つの解釈は、学年があがるにつれて受験を真剣に考えるようになり、入試についての情報が増えて理解が深まり、考えが変わっていったという解釈

である。この解釈をとると、高校生全体で女子枠賛成が多いのはたんに状況をよく理解していない 1、2 年生がはいっているからであり、依拠すべきは 3 年生あるいは 18 歳のときの意見ということになる。そうすると高校生は大人より女子枠賛成が多いという補図 1 の結果は割り引く必要が出てくる。

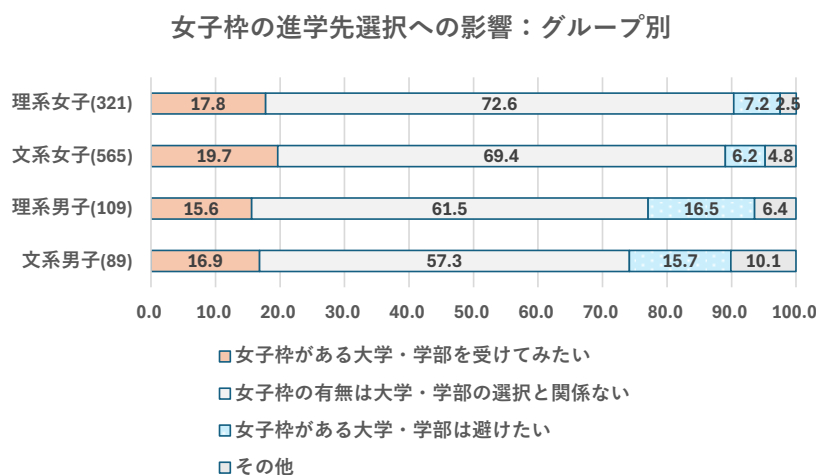
補図 2



女子枠の利用動向

高校生なので女子枠の設定が進路決定影響するかを聞くことができる。進学先について女子枠のある大学・学部に行きたいか、行きたくないか、あるいは関係ないかを選んでもらった。結果は補図 3 のとおりである。

補図 3



まず、「進路選択に女子枠の有無は影響しない」という人が 6～7 割で圧倒的に多数派である。女子枠を設定する大学は数としては少ないので納得できる数字であろう。

「女子枠のある大学・学部を受けてみたい」人は 15% くらいである。興味深いことに、

4 グループで差がなく、男子にも女子と同じくらいの人気を集めている。これは意外性がある。女子枠があると男子にとって入試は不利なはずであるが、それにもかかわらず（女子を同じくらいの割合で）女子枠のある大学を受けてみたいという男子がいる。男子も同じ学部女子が多いことに魅力を感じているのかもしれない。これは女子枠推進側にとって良い材料である。さまざまな属性を持った人を受け入れて多様な大学をつくるという理念が理解されていると解釈できるからである。

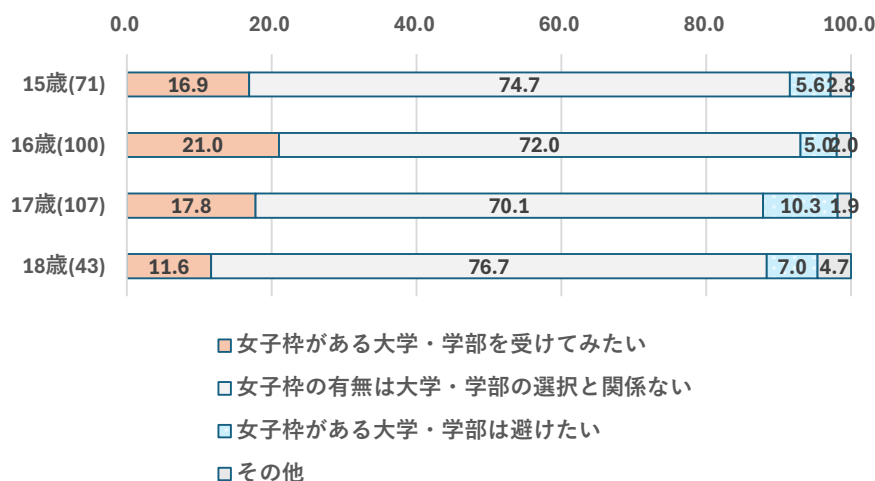
ただし、男子では「女子枠のある大学を受けたくない」人が 15% くらい存在しており、一定数の男子は女子枠のある大学の受験を手控える傾向がある。受けてみたいの 15% と避けたいの 15% は同じ数字であり、ちょうど拮抗する。

理系女子

理系女子の場合について詳しく見てみる。¹⁷ まず、年齢別の変化を見る。補図 4 が年齢別の変化である。これを見るとどちらといえば年齢があがるにつれて女子枠を受けたいという意向が減り、避けたい気持ちが増えるように見える。学年が上がるにつれて受験に真剣になり、入試についての情報が増えると、女子枠の問題点にきづくと言うのが一つの解釈であろう。

補図 4

女子枠の進学先選択への影響（理系女子）：年齢別



¹⁷ 文系女子の場合、女子枠のある大学を受けたいと言っても、今回の設問のしかたでは趣旨がはっきりしない。女子枠は理系しかないからで、その場合文系女子が女子枠のある大学を受けたいと言うのはいろいろの意味にとれる。1)これから理系に転じて女子枠のある理系大学・理系学部を受けたい、2)これから文系での女子枠がもしできたら、そこを受けたい。3)女子枠を設けた理系学部ある大学の文系の学部を受けたい。この設問のしかたでは、いずれともとれる。本稿の問題意識は女性の理系選択なので、重要なのは1)であるが、1)がどれくらいあるかわからない。日本の高校では 2 年進級時に理系文系の選択をさせることが多いことを考えると 1)は少なそうではある。

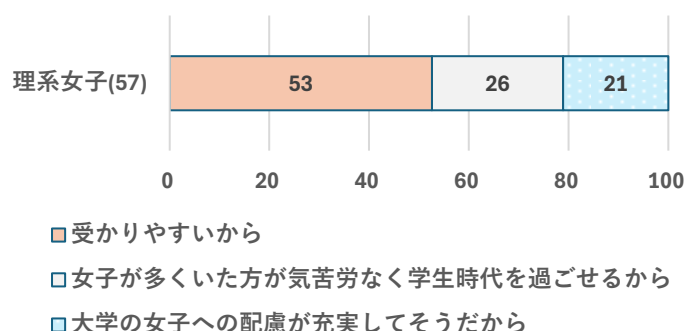
女子枠を受けたい理由、避けたい理由は何であろうか。これを聞いてみよう。補図4の左端で女子枠のある大学・学部を受けたいと答えた人をあわせると57人になり、一方、右端の女子枠のある大学をうけるのを避けたい人はあわせて22人になる。該当サンプル数が少なくなるので回答は3つほど候補を用意してそこから一つだけ選んでもらった。女子枠を受けたい理由の候補はつぎのとおりである。

- 1 受かりやすいから
- 2 女子が多くいたほうが気苦労なく学生時代を過ごせるから
- 3 大学の女子への配慮が充実していそうだから

1は女子枠のそもそもの導入理由である。2は女性为数が少ないことが理系への進学を思いとどませているという意見をよく聞くのでいれた。3は、大学の女子への配慮を評価したものである。女子枠を受けたいと答えた理系女子57人に聞いた結果は補図5のとおりである。

補図5

女子枠のある大学・学部を受ける理由



受かりやすいから、が半分を占めており、最も多い。女子枠の趣旨から考えて当然である。しかし、それだけではない。女子がいたほうが気苦労なく過ごせる、を選んだ人が4分の1おり、この理由にも一定の支持がある。大学の女子への配慮を期待している声も同じくらいある。

続いて、女子枠のある大学を避ける理由を同じように三択で聞いた。候補はつぎの3つである。

- 1 入学した後ついていけなくなりそうだから
- 2 社会に出てから優秀でない（特別枠の人）と見られてしまうから
- 3 男性と同等の条件で競争したいから

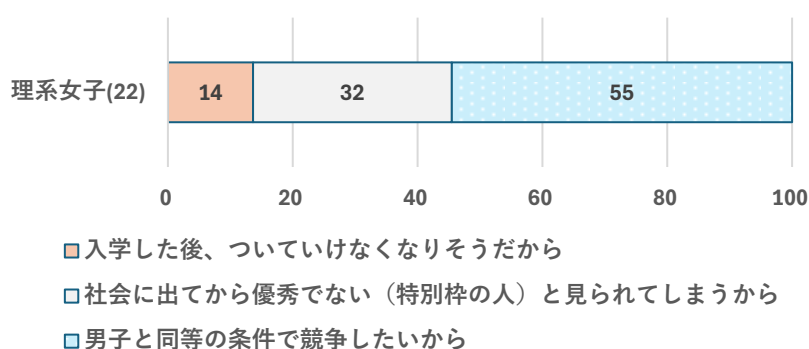
1は学力問題である。先行導入した名古屋工業大学では対策として女子枠合格者向けに入学前に数Ⅲの補講を提供しているという（井門(2025)）。この事実は学力問題があることを示すが、同時にあっても対策可能であることも示すといえる。2はスティグマと言われる問題で、女子枠のある学部の出身者は優秀ではないと世の中から烙印を押され

てしまうという問題である。3 はより単純に男性と同等の条件で競争したいという意見である。

女子枠を避けたいと答えた理系女子 22 人に聞いた結果は補図 6 のようになった。サンプル数が少ないので大雑把な結果だけを見る。まず 1 の学力不足問題を避ける理由に挙げる人は 1 割程度でほとんどいなかった。2 のステイグマ問題は 3 割の人が理由に挙げており確かに意識されており、女子枠回避の一定の理由になっている。最も多いのは 3 の男性と同等の条件で競争したいからで、これが半分以上を占めた。2 と 3 をまとめると、女子枠を避けたいという女子は、女子への特別扱いは不要で、男子と同等の条件で競争したいと思っていると考えられる。

補図 6

女子枠のある大学・学部を避ける理由



全体を振り返ると高校生全体としては女子枠に賛成する人が成人男女より多く、また、女子枠のある大学・学部を受けたいという人が男女ともに 15%おり、当事者である高校生は女子枠を受け入れているように見える。但し、学年差が大きく、受験が近づくにつれて女子枠に批判的になり、また避けるようになる傾向があり、判断は早計である。なお、これまでの先行調査では学年の差を分けておらず、これは適切でない。学年による差は大きいので、今後高校生を調査するならそれを踏まえた調査設計をする必要がある。